平和への祈り　鎮魂の詩

回顧終戦五十年

千阪　賀秀

序文

私は戦時中、広島文理科大学漢文学科二学年の時、「愛国行進曲（見よ東海の空あけて）」を作詞して、戦後マッカーサーの指令によって「国粋主義を鼓したる者」として公職追放処分を受けた戦争犠牲者である。一九四五年（昭和二十年）八月六日原爆投下によって焦土と化した広島の現地を訪ね恩師や学友の姿を求めて彷徨（ほうこう）したが、そこには恩師も学友も無く累々たる残がいが重なる生き地獄を見たのである。

今年、戦後五十年に当たり戦争の悲惨さを追想して「平和への祈り」をつづり戦死者にささげる追悼の漢詩、鎮魂歌を創作した。

本文

私は、昭和十五年三月、広島文理科大学漢文学科を卒業して旧制広島師範学校に就職した。大東亜戦争が激しくなった昭和二十年三月、神戸市の旧制神戸一中に転任した。その直後八月六日に広島に原爆が投下された。私の転任が遅れていたら、私は爆死している。自分は助かったが母校の恩師や学友の身上を思い戦慄（りつ）した。数週間後に現地に急行した。焦土と化した市街母校も就職校も影も形もなく焼けただれた残がい、家族を求めて苦しむ人々を眼前に見てがく然とした。恩師や学友の姿もない。国破れて山河もなく、広島は今後何年か草も生えないと言われた。この惨状は今でも胸中に焼きついている。核兵器がある限り人類の恒久平和は望めない。

終戦五十年を迎えて全世界の戦没者に対し慰霊の式典が世界の各地で催されている。わが国においても天皇・皇后両陛下が戦後五十年に当たり戦争犠牲者を慰霊し、平和を祈念

するため原爆投下によって多数の市民が犠牲になった長崎と広島へ七月二十六日と二十七日訪問され長崎の平和記念像前、広島の原爆死没者慰霊碑前にそれぞれ供花されて犠牲者のめい福をお祈りになった。わが国は広島・長崎に原爆が投下された、世界最初の被爆国である。戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさを後世に伝え世界恒久平和を祈り続けなければならない。私は八月十五日終戦記念日に行われる戦没者追悼慰霊式典に全国民が黙とうし平和の祈りをささげる鎮魂歌として「平和への祈り回顧終戦五十年」の七言古詩を創作した。

平和への祈り　鎮魂の詩

回顧終戦五十年　東山　千阪　賀秀

回顧星霜五十年　回顧す　星霜　五十年

原爆投下恨綿綿　米軍の　原爆　恨　綿綿

広島長崎化焦土　広島　長崎　焦土と　化し

累累残骸轉暗然　累累たる残骸　轉　暗然

爆風に（昭和天皇）

爆風にたふれゆく民のうえをおもい
いくさとめけり身はいかならぬとも

希求和平人類愛　和平を希求するは人類の願い

世界一家望安全　世界は一家安全を望む

献花黙禱追悼典　献花黙禱追悼の典

平和鐘鳴九萬天　平和の鐘は鳴る九萬の天